

侍と探偵の蜜月

——大衆文学ジャンルの再編成における捕物帳——

影 山 亮

I

文学の世界において、それまでの既存ジャンル領域が再編成を迫られたタイミングが何度かあった。探偵小説、時代小説が戦時下および、占領下での検閲による影響を受けた時期もその一例である。言うまでもなく戦時下において探偵小説の執筆は制限され、時代小説の執筆が推奨された一方で、占領下においては前者は自由を、後者は制限へと追い込まれたことを指している。しかしセシル・サカイが、

戦前の作家の大部分には自分の専門を守って好みの

ジャンルに閉じこもりとする傾向があり、(略)作家と彼が選んだジャンルとのあいだには共生関係のようなものがあつたのだ。この点に関しては中里介山や吉川英治にとっての時代小説、江戸川乱歩にとっての探偵小説などの例が示唆的だろう¹

と論じているように、戦時下において筆を折った乱歩や、占領下において極端に作品数が減少した吉川に代表されるような、執筆が制限されながらも頑なに他のジャンルに転じることがなかった大衆文学作家も存在した。彼らのように自らの作品ジャンルに特別なこだわりを見せた作家のなかには書かない、または執筆数を減らすという手段を取る

一方で、自ジャンルの要素を含んだ他のジャンルの作品形式に歩み寄る作家も少なくなかった。すなわち戦時下の検閲によって一部の探偵小説作家が、時代小説の作品形式であった捕物帳を執筆したことがそれである。言い換えるならば戦時下における執筆環境が著しく異なっていた時代小説、探偵小説文壇において、一部の探偵小説作家が捕物帳という作品形式を選択したが、その動きに雑誌メディアも相乗りし、両ジャンルは接近を果たしたと言えよう。また一方で占領下の検閲によってあべこべの状況となった両文壇であったが、今度は時代小説作家たちが進んで捕物帳を執筆し、その動向に雑誌メディアも特集を組むなど、再び両ジャンルは接近を見せることになった。

捕物帳研究といえはその始祖である岡本綺堂「半七捕物帳」や、横溝正史「人形佐七捕物帳」などの個々の作品を論じるか、あるいは戦前の捕物帳に関するものがほとんどである。本稿では個々の作品論ではなく、戦時下から占領下において探偵小説と時代小説が、それぞれの状況下において再編成を求められたなか、捕物帳という作品形式が重要な役割を果たしていた過程を詳細に追っていく。それとともに、乱歩や野村胡堂など、各ジャンルにおいて一定の発言力を持っていた作家らの動きや、言説に着目しながら

「探偵作家クラブ」と「捕物小説作家クラブ」の動向にも光を当てることが目的である。

II

尾崎秀樹は捕物帳に関して「関東大震災前後の第一期、いわゆる満州事変前後の第二期の時期、日中戦争中の第三期」²と、その流行時期を区分している。捕物帳という作品形式は言うまでもなく、岡本綺堂『半七捕物帳』に端を発する。大正六年一月から『文芸倶楽部』において連載された同シリーズは発表当時「江戸探偵名話」と副題がついており、また連載第一回「お文の魂」に「彼の冒険仕事はまだまだほかにたくさんあつた。彼は江戸時代に於ける隠れたシャアロック・ホームズであつた」とあるように、コナン・ドイルのシャアロックホームズに多大な影響を受けていることは周知の事実である。連載当初はそれほど反響もなく、大正六年七月に平和出版社から刊行された初版本は、増刷もされなかった。しかし『講談倶楽部』『新青年』『週刊朝日』『サンデー毎日』などの各誌に掲載され、大正十三年から十四年にかけて五巻揃えて新作社から刊行された単行本は、たちまち版を増しブームとなった。これ

が尾崎論曰く、第一の時期にあたる。

昭和十年代には佐々木味津三「右門捕物帖」（『富士』）、野村胡堂「銭形平次捕物控」（『オール読物』等）、額田六福「諸国捕物帳」（『文芸倶楽部』）など、数々の捕物帳が様々な作家によって執筆された。綺堂自身は大正十四年十月に「三つの声」を『新青年』に発表したのちは捕物帳の筆を折ることを決意していたが、編集者からの強い要望によって昭和九年から連載を再開している。これが第二の時期である。さて本稿では、続く第三の時期に注目したい。

国策的傾向によって題材に制限をうけた探偵作家たちが、好んで捕物小説を書いた時期である。いわゆる盧溝橋事件から太平洋戦争がはじまる頃までの数年³

と尾崎が言及する第三の時期は、横溝正史「人形佐七捕物帳」（昭和十三年『講談雑誌』）、城昌幸「若さま侍捕物帳」（昭和十四年『週刊朝日』等）、六戸部力（久生十蘭）「顎十郎捕物帖」（昭和十四年『奇譚』）に代表されるように、探偵小説の書き手たちが捕物帳を続々と執筆した時期である。戦時下において探偵小説は時代小説の股旅ものがそうであったように、その犯罪性やエロ・グロ的な面が「風俗

壊乱」「安寧秩序紊乱」と判断され、検閲や発禁の対象となり、執筆を制限されていた。そのため戦前からの探偵小説作家たちは筆を折るか、もしくはスパイ物や冒険小説へ鞍替えすることになった。そのなかには捕物帳という時代小説の作品形式へ手を伸ばす作家もあり、その代表格が横溝であった。横溝自身も、

人形佐七が誕生したのは、昭和十三年頃の「講談雑誌」誌上であった。その頃、私は健康を害して、信州上諏訪で療養生活をしていたのだが、そこへ、当時「講談雑誌」の編集長をしていた乾信一郎君が手紙をくれて、捕物帖をやらなかと奨めてくれたのであった。療養生活に貧乏している私のために、いつまでも書きつづけられる、捕物帖という形式を選んで、私の仕事にしてくれたのである⁴

と回想している。「いつまでも書きつづけられる」という表現は、捕物帳の定型化された筋を指している。あるいは戦時下において雑誌編集者側から捕物帳というコンテンツは商業的観点から見えて、ある程度の売り上げを見込めると捉えていたのだろう。結果として捕物帳でありながら比較

的血なまぐさい描写の多かった『人形佐七捕物帳』は『講談雑誌』への連載を途中で打ち切られるものの、「単行本にして出すことまでは禁止しなかったので、この方の税収入のおかげで、辛うじて私は終戦まで食いつなぐことが出来た」⁵とあるように、出版自体は続けられ、横溝が第三の時期に意識的に捕物帳という作品形式に歩み寄ったことが分かる。

一方で昭和十年代の時代小説文壇において、それまでの定型化された時代小説を打破し、歴史小説への接近を牽引するなど、活甦な評論活動も展開していた第三次『大衆文芸』（新小説社）に目を配ると、

私はオールを手にとると、まづ読むのは銭形平次である。探偵小説が影をひそめた現在、私のやうな読者は随分多いことゝ思ふ。胡堂氏の健闘を祈つてやまない⁶

野村氏の銭形物はもう沢山である。この作なども、何処に一つ捕物らしい匂ひも、味もなく、たゞ愚劣な話の筋を売つてゐるに過ぎない⁷

などのように探偵小説が雑誌に掲載されなくなった同時期において、その代替として読者から読まれていながらも、批判の俎上に挙げられていることが分かる。「愚劣な話の筋」という指摘は、重厚さや気迫を重視し、歴史小説への接近を図っていた昭和十年代の時代小説文壇の文脈に接続するならば、絶対的な主人公が超人的に事件を解決するという、講談的で定型化された筋を追うだけの捕物帳という意味合いでの批判と読める。しかし、捕物帳自体は同時代において広く雑誌に掲載されていたことも事実である。昭和十二年から『少女倶楽部』に連載された野村胡堂「時代捕物 娘影武者」や、同年『日本少年』に連載された角田喜久雄「いろはの左近捕物日誌」など少年少女向け雑誌においても捕物帳という作品形式が散見される。一方で戦前の探偵小説の総本山たる『新青年』に目をやると、昭和十四年七月号には「新進時代小説傑作集」が、また九月号には「特選時代小説」というコーナーが創設され、不定期であるが作品が掲載されている。同コーナーは昭和十五年新年特大号から、土師清二「うつそり長門」や、山手樹一郎「戴鶯」、村上元三「月毛の密使」、木村哲二「道心日記」など同時代の時代小説文壇において注目されていた作家、そうではない作家を含め各月三話ずつ掲載されるようになって

た。当時の編集長は水谷準であり、彼が推進したかどうか定かではないが、編集側の意図であったことは確かであろう。そんななか昭和十五年四月号「編輯さろん」において、

進歩的大衆小説のデパートを以て任ずる本誌です。時代物を毛嫌いする読者の声もちよいちよい聞こえるが、先づ読んで頂きたい。あなたは、きつと新青年の時代物のファンになれるでせう。

と、時代小説不要論が「愛読者欄」において掲載されていることに応え、探偵小説専門雑誌から、大正末に成立した大衆文学と同義の意味であった時代小説を引き続き掲載すること、総合大衆小説雑誌を志向することを宣言している。そして翌々月の六月号において同誌は「特輯新作評判捕物集」と題して六戸部力（久生十蘭）「顎十郎捕物帳」、野村胡堂「手柄の銀次捕物帳」、横溝正史「人形佐七捕物帳」、城昌幸「若様侍捕物帳」、土師清二「東吉捕物帳」を特集掲載している。「編輯さろん」には「新進花形と老大家の捕物競演は、新青年でなければ出来ぬ企画です。とくと吟味されたい」と、同時代の各雑誌において捕物帳作家陣の作品を一挙掲載していることを誇っている。これは同時

代読者からの捕物帳への需要と、探偵小説への検閲を避けるといった編集意図が含まれているだろう。実際同号の目次を見ると「探偵小説」と角書きされている作品は、赤沼三郎「林檎と手風琴」の一作だけである。また翌月の七月号には「読切中篇時代小説」として木暮慎太郎「南風」が掲載され、探偵小説は翻訳物を含めて二作となっている。

これらの事実を鑑みれば捕物帳はあくまで時代小説ジャンルの作品形式であり、大正末期から昭和十年代に流行を見せたが、その話型は定型化の打破を目指していた同時代の時代小説文壇からは批判の対象としても挙げられる、もしくは批評の俎上には上がらなかったと想定できる。一方で探偵小説作家たちにとっては「江戸時代に於ける隠れたシヤアロック・ホームズ」の半七を祖とし、探偵小説の要素を含んでいるため戦時下において執筆を制限されながらも、それに抵抗するように自らのジャンルにこだわりを見せるという個人的事情を抱えた一部の者たちが選んだ作品形式であった。また同時に戦時下における検閲への対応を迫っていた探偵小説雑誌にとっては、商業的観点からも好んで取り上げたコンテンツであったのであろう。しかし敗戦によるGHQの占領は、両ジャンルの立場を真逆のものにした。

III

本々高太郎は昭和二十一年からの大衆文学文壇において注目すべき現象を、以下のように三つ挙げてゐる。

第一は、何と云つても探偵小説の興隆である。(略)

第二の特筆す可きことは、進駐軍司令部より、軍国的封建的の文化の一掃の意味から歌舞伎台本半ばが禁止せられると共に、封建的歴史小説、股旅もの等が殆ど禁止に近い処置がとられたので、大衆小説の大半を占めてゐた、時代小説は殆ど潰滅して了つたことである。(略) もう一つ特筆す可きことは、戦前の所謂大衆文芸と純文学との区別が少しづゝなくなりつゝあることである。而もそれは、作家が容易に固執を去らぬに反して、編集者の側から現はれてゐる。

敗戦直後からGHQは教育文化政策を担当するCIE(民間情報教育局)を、さらにCCD(民間検閲支隊)を設置した。CIEとCCDが検閲を開始した正式な日付は不明だが、昭和二十年九月二十二日、CIEのグリーン中佐、マイケル・ミッチェル少佐、デビット・コンデらが松竹、

東宝、大映など日本の映画会社の首脳部や監督、政府の役人など約四十名招集し、今後の映画製作についての方針を示した。また内務省で行われていた映画検閲が終了し、GHQによる検閲が始まったが、同年十一月十九日付で日本映画に対し以下のような十三に及ぶ規制項目が提出された。

- 一、軍国主義を鼓舞するもの。
- 二、仇討ちに関するもの。
- 三、国家主義的なもの。
- 四、愛国主義的ないし排外的なもの。
- 五、歴史の事実を歪曲するもの。
- 六、人種的または宗教的差別を是認したもの。
- 七、封建的忠誠心または生命の軽視を好ましきこと、または名誉あることとしたもの。
- 八、直接間接を問わず自殺を是認したもの。
- 九、婦人に対する圧制または婦人の墮落を取り扱ったもの。
- 十、残忍非道暴力を謳歌したもの。
- 十一、民主主義に反するもの。
- 十二、児童搾取を是認したもの。

十三、ポツダム宣言または連合軍総司令部の指令に反するもの。

これがいわゆる「チャンバラ禁止令」の名で知られているプレスリリースである。この十三項目のほとんどに該当した時代劇映画（チャンバラ時代劇）は、製作が自ずと不可能となった。またこのプレスリリースは映画だけでなく、時代小説へも適用され、戦前から活躍していた時代小説作家たちは、その最大の武器たるチャンバラを封じられてしまった。加えて鹿島孝二に代表されるように、

戦争後大衆文芸がどうも面白くなくなった、と一般に言われているようである。（略）たとえば嘗ての雑誌「文学建設」グループの運動とか、又今日も続いている雑誌「大衆文芸」を中心とした大衆文学運動がその表れ¹⁰

と、戦時下の大衆文学、特に時代小説文壇が余りに史実に忠実な作品を重視したために面白味が失われ、その動きを先導した二誌へ批判を向ける意見もあった。確かに先述の二誌は、時代の雰囲気として「歴史」が求められていた戦

時下において、時代小説を歴史小説へ接近させるような評価軸に基づく作品評を同誌で展開していた。しかし関東大震災後にユーモア性が強く、明るい作品が好まれたように、占領下においても同様の作風が求められていた。この鹿島の発言には、戦時下においてユーモア小説である自作が評価されなかったという状況も関係しているであろうが、敗戦後の日本において明るく面白味のある作品が希求されていたことは、山手樹一郎の復活ぶりからも否定できないであろう¹¹。

チャンバラを封じられながら、娯楽を主眼に据えた作品が求められるなかで、時代小説作家たちはこの事態を打開するため、いくつかの手段を講じた。例えば先に触れたように山手は戦前から一貫していた自作の明朗性をここぞとばかりに全面に押し出し、敵を斬らない夢介を主役に据えた「夢介千両みやげ」を、明朗雑誌を志向していた『読物と講談』に連載することで人気作家へと躍進を遂げていった。山手は明朗性を全面に押し出した作品で成功した（山手の場合は戦前から一貫した創作法だが）、最たる例であろう。鹿島孝二や田岡典夫らもこれに続く一派である。また股旅物で戦前から活躍していた長谷川伸は、このチャンバラ禁止を見据えていたかのように戦時下から蒐集した資

料を基に『日本捕虜志』を執筆した。一方で吉川英治のように作品数は減少したものの、新たな作風に転ずることはなく、歴史大河を意識した作品を書く時代小説作家も多く見られた。そんななか野村胡堂の『銭形平次捕物控』は戦前からの連載を続けており、一定数の読者を抱えていた。また『半七捕物帳』は昭和二十三年に同光社から、『右門捕物帳』は昭和二十四年に青葉書房から単行本が刊行されるなど、捕物帳への需要は戦前と変わらないものがあつた。捕物帳は基本的には岡っ引きが怪しく謎めく事件を解決していく筋であるから、チャンバラシーンを描かずとも作品が成立し、同時に娯楽的要素も併せ持つており、チャンバラを封じられた占領下の時代小説作家にとって、好都合の作品形式であつた。もちろん時代小説作家全員が占領下において捕物帳を書いたわけではないが、敗戦後はじめて刊行された昭和二十年十月の『大衆文芸』に村上元三「捕物蕎麦」が掲載され、先に述べた山手さへも「遠山の金さん」シリーズ（『小説の泉』等）を捕物帳として執筆している事実からも、捕物帳という作品形式への注目が集まっていたことが分かるであろう。他にも小説社から『捕物講談』（昭和二十四年三月）が発刊され、土師清二「時代捕物いろは義賊」（『妖奇』昭和二十三年九月）などの時代小説作

家はもちろん、横溝正史「智慧若捕物帖」（『中学生の友』昭和二十三年十二月）など児童向け雑誌にも捕物帳が見受けられる。さらに直接の影響かどうかは定かではないが、田河水泡「のらくろ捕物帳」（『冒險世界』昭和二十三年十一月）や、志村つね平「三下り半七捕物帖」（『妖奇』昭和二十三年十一月）など、マンガジャンルにおいても捕物帳を意識した可能性が窺える作品も同時期に見られる。つまり占領下において捕物帳は、時代小説作家にとってチャンバラを封じられながらも、娯楽性を求められるというジャンルの再編成が推進されるなかで、読者の需要に応えながら、執筆の制限をいくぐることを可能にした作品形式であつた。それは戦時下における探偵小説ジャンルにとつての捕物帳と同じ意味合いであつた。では時代小説と入れ替わるように、執筆の自由を得た探偵小説の占領下での活動はどうであつたのかと言えば、自由を謳歌するほど簡単なものではなかつた。

IV

戦時下における制限から解放された探偵小説文壇は確かに活気づいていた。乱歩は昭和二十一年度と二十二年度の

トピックスをそれぞれ「探偵小説復活の昂奮」、「探偵作家クラブ結成」と回想している。前者は自身が携わった『宝石』の創刊と、横溝正史「本陣殺人事件」連載を指している。加えて『宝石』を含めて五つの探偵雑誌(『ロック』『宝石』『トップ』『ぶろふいる』『探偵よみもの』)が発刊されるなど、探偵小説の復活を告げる出来事を挙げている。後者は、戦後になり乱歩のもとを訪れる探偵小説作家や編集者が『宝石』を発行する岩谷書店が入っていた川口屋銃砲店の二階広間を借りて開催していた会合である「土曜会」を前身として、昭和二十二年六月に結成された団体「探偵作家クラブ」のことである。そのメンバーは、会長である乱歩をはじめ水谷準、木々高太郎、海野十三、大下宇陀児、横溝正史、角田喜久雄、野村胡堂、城昌幸らで構成され、同会の主な活動は会報誌である『探偵作家クラブ会報』の発行、犯罪の研究の報告会のほか、昭和二十三年には探偵作家クラブ賞(現在の日本推理作家協会賞)を設立する。また年度別に『探偵小説年鑑』を刊行するなど、その活動は探偵小説文壇に大きく寄与していた。乱歩は翌、昭和二十三年、二十四年度を「探偵小説第三の山」と回想しているが、その所以を、

小説界に於て、探偵小説は戦後最も早く最も多くの新人を生んだ分野に属する。それは戦後一、二年のあいだ、一般読物界にやや行きすぎの旧套忌避の風潮があり、久しく圧迫されていた西洋流の探偵小説に、雑誌編集者の着眼が集中され、探偵雑誌なども、おそらくは需要以上に多種のものが生まれたこと、また一方には、探偵作家クラブが結成され、その組織力をもって新人の発見と育成につとめたことなどによるものである¹²

というように「探偵作家クラブ」の組織力が戦後の探偵小説興隆に影響を及ぼしていることを指摘している。乱歩がこのような会を結成するのはこれが初めてではない。大正十四年に白井喬二の提唱により結成された「二十一日会」や、同年に大阪毎日新聞社会部副部長だった星野龍猪が当時、大阪在住の江戸川乱歩に結成を提案し組織された「探偵趣味の会」がそれである。この会には小酒井不木、甲賀三郎、夢野久作ら探偵小説作家だけでなく、長谷川伸や白井喬二など時代小説作家も含まれており、機関誌として『探偵趣味』を刊行していた。乱歩が会合を結成することに積極的なのは、それによって、いわばジャンルを可視化し

て、探偵小説作品掲載の場の確保と、作家の執筆をさらに活発にさせることを目的としていたと考えるのが妥当であろう。加えて「探偵作家クラブ」では昭和二十二年十月二十一日に物故探偵作家慰霊祭を、昭和二十四年十月十一日にはポー百年記念講演会を開催している。鬼籍に入った同僚や、自ジャンルの形成に大きく寄与した者たちを再び取り上げるイベントを実施することで、自ジャンルの歴史と形成の過程を再確認していたのではないか。一方で執筆の制限から解放された探偵小説への需要が高まるなか、ジャンルを揺るがす事象が起きていた。

占領下の探偵小説文壇において大きなテーマとなっていたのが探偵小説・非文学論争と、いわゆる純文学作家の探偵小説への流入であり、この二つは相互に密接に関係している。

「探偵小説」が「推理小説」と改称されていく途上に、斬新なトリックと論理的な謎解きのプロセスを眼目とする「本格物」の推進を説く江戸川乱歩と、文体、構成、描写のいずれにも純文学作品に比肩し得る芸術性を追求すべきことを主張する木々高太郎との間に論争が勃発したのだ。これが「探偵小説・非文学論争」

である¹³

探偵小説・非文学論争については右のように谷口基が的確にまとめているが、乱歩と木々の間に起こったこの論争には、昭和二十一年十一月に定められた当用漢字リストから「偵」の字が外れ、新しい呼称が必要となり、木々が提唱した「推理小説」という名前に賛同が集まったことも背景にあった。それとともに探偵小説ジャンルへ純文学作家の流入を歓迎していた木々と、それを歓迎できない乱歩の論争と見ることが出来る。例えば乱歩は、

自分は決して、本格物に偏執するわけではないが、特に、日本では、本格物が、海外に於けるが如き、隆盛の時期を経験しないで、一応、本格物の分野に於ける精進を期待すべきものと考えたと、結論した¹⁴

と、多少回りくどい言い方をしているものの、本格物を推進する立場を表明している。一方、海野十三は、

本格探偵小説を尊敬するのは結構だが、面白くない本格探偵は一向結構でない。そのやうな作品ばかり読

まされては、たまつたものじゃない。(略) 乱歩氏は『石榴』を自分の名作として居るが、乱歩氏の作品を年代順に読んで来て、あれにぶつかる和小手先の器用さは気がつくが、およそ総ざらえ的な陳腐なもので、乱歩独特の高い香などすこしも感ぜられない¹⁵

と、乱歩の『石榴』を駄作と批判し、本格探偵小説を若い作家に推進する人(乱歩を指してであろう)を「変態男」と断じている。また同時に、坂口安吾やその他の作家が探偵小説を書くことは結構だが、ろくなものは書けない、十年間この道を勉強しなければ読まないとも言及している。またこの論争の主戦場であつた『ロック』誌上における昭和二十二年一月からの乱歩と木々のやり取りでは木々が、

探偵小説が成立するには、トリックがあつて成立するのではない。その内容があつて、而も、トリックはその内容から必然的に規定されることによつて、はじめて成立するのである。さうなつて、はじめて、その小説は探偵小説であり、而もそれは完全な芸術品でもある¹⁶

と論じたことに対して、乱歩は探偵小説へ文学性を持ち込めば「探偵小説としてはつまらな」くなるとし、さらに、

私はまだ探偵小説の探偵小説らしさを愛する。この「らしさ」を失つたたゞの文学を、私は探偵小説と呼称する必要を認めないのである。それは最早探偵小説といふジャンルが消滅することである¹⁷

探偵小説は、(略)文学本来のものを排除するわけではないが、その目ざす中心題目は巧妙なる謎の組立てとそれを解いて行く論理の面白さにある¹⁸

と反論するが、木々は、乱歩の言及は「探偵小説の形式であつて、本質ではない」¹⁹と応戦している。決して議論が噛み合っているとは言えまいが、乱歩が「つまらない」「面白さ」という語を使いながら自説を展開していることは興味深く、加えて議論の行き詰まりを感じて新展開を望みながら、

ポーによつて創始せられた探偵小説はさういふ一般文学とは別個のものとしてであつた。別個のものなる

が故に特別の文学ジャンルを為し、探偵小説といふ固有名詞をも生じたのである。私はさういふ特殊文学としての探偵小説を愛した。(略)今も愛している。これが進歩することは望ましいが、変形することは望ましくない²⁰

と、既存の探偵小説ジャンルの閉鎖的な特殊性を強調し、その「変形」を拒否する立場を改めて明らかにしている。

木々が望んだ純文学作家の探偵小説への流入として象徴的な出来事は、昭和二十四年に坂口安吾が『不連続殺人事件』を執筆し、探偵作家クラブ賞を受賞したことが挙げられるだろう。この出来事に対し乱歩は、「探偵小説界における一つの特記すべき出来事」²¹としつつも、

「私(安吾…論者註)に授賞されるとのことだが、現在の探偵小説手法は底をついたと思うし『黙って坐ればピタリと当る』式のナンセンス名探偵をノックアウトしたい。」(略)これは探偵作家への毒舌であつて、坂口君は賞をもらうことが面白くないので出席しなかったのだと、私(乱歩…論者註)は感じた。そして、少し不快であつた²²

というように、既存の探偵小説打破を掲げる安吾に対して不快感を滲ませている。乱歩と木々の論争自体が、探偵小説文壇を盛り上げるための自作自演と取る見方もある。しかし水谷が乱歩、木々、大下宇陀児、野村胡堂が集まり「探偵小説文学論乃至本格変格論」を議論してことを伝え、

大いに意義はあつたのだが、僕はそれが発展して議論のための議論になり、議論してゐることが探偵小説を隆盛にするやうな錯覚、(近い過去に於て日本が犯したやうな錯覚)に陥る…²³

という危険を避けるために、自身は「一種の帰納論的なシニズム」を用いて、この議論の下に小説を書きたいとは思わないと自説を主張したことを報告している。探偵小説というジャンルの在り方を問う議論によって、ジャンル自体の盛り上がりと錯覚することに対する水谷の危惧は興味深い。また少なくとも執筆の自由を獲得したが故に、探偵小説というジャンル自体が改めて議論され、木々に代表される再編成を促す動きと、乱歩に代表される既存のジャンルを維持しようとする動きがあつたことは間違いないだろう。そしてこの動向のなかで、探偵小説文壇から捕物

帳という作品形式への言及が目立っていく。

V

敗戦後、捕物帳という作品形式に注目したのはまず探偵小説文壇であった。戦前の『新青年』と取って替わるように、探偵小説文壇の中心的雑誌『宝石』が昭和二十一年三月に創刊されるが、同年六月の一卷三号は「捕物帳特集号」と題して角田喜久雄「娘捕物帳」、横溝正史「人形佐七捕物帳」、納言恭平「花川戸七之助」、城昌幸「若さま侍捕物手帖」、名作絵物語として「半七捕物帳」を掲載している。同誌の編集長が城であることも多分に影響しているだろうが、この時点で捕物帳に目をつけている点は注目に値する。同号の「探偵小説壇」には、

捕物帳といふ、探偵小説の一派が、わが国では異常な発達を示してゐる。(略)捕物帳の方面に於てはその殆どが本格物である。書き難い筈の本格物が、寧ろ易々とこなされてゐるといふ事は、トリックが、現代物に於る程、深刻、嶄新でなくとも許されるといふ事実の為だ。それだけ、純粹に云へば低いとも批評され

やうが、然し……捕物帳には夢がある。過去の美しい世界への憧憬がある。これが、読者への大きな魅力となつてゐることも見逃せない²⁴

とある。「捕物帳には夢がある。過去の美しい世界への憧憬がある」という一節は捕物帳を肯定する際に繰り返し使われる言葉であるが、同時に探偵小説としてはトリックが純粹に低いと捕物帳の欠点を指摘している点は、探偵小説文壇からの本音であろう。しかし同時に、

さうまで突きつめて考へず、或る程度のトリックで、面白さを樂々と狙つてもよいではないか。もつと幅の広い筋立てで、作者も読者も氣樂に、安易な気持ちで読める通俗探偵小説が輩出してもよからう。専門家からは、甘いと例へ批評されやうとも。何故なら、之れが求められてゐるのだから。現代物に対する、この希望は、捕物帳では、ほぼ充たされてゐる。捕物帳が持て囃され、魅力ある所以だらう²⁵

と続けているように「安易な気持ちで読める」ことが、捕物帳の人気を支える魅力であり、その魅力を同時代の探偵

小説文壇も見習うべきとも言及している。捕物帳へ注目が集まるなか結成されたのが「捕物作家クラブ」である。同クラブは、

発起人野村胡堂、土師清二、角田喜久雄、山岡荘八、山手樹一郎、横溝正史、城昌幸、村上元三、大林清、松波治郎、納言恭平（逝去）、藤間哲夫諸氏らの呼びかけで、昭和二十四年七月七日、涼風薫る稲田登戸の紀伊国料亭で発会式を挙げた。（略）人形佐七捕物帳の作者横溝正史氏の座談から発し、探偵作家クラブ会長江戸川乱歩氏が火つけ役となつて、野村胡堂氏を焚きつけたのであつた²⁶、たちまち、会員七十六名参加結成をみたのであつた²⁶

というように時代小説作家だけでなく、横溝ら戦前から捕物帳を書いていた探偵小説作家が参加し、乱歩の強い薦めによって結成された。また毎年秋に捕物まつりと称して文化講演会や、文士画家劇を上演するなどさまざまなイベントを同会では企画するが、その経費は有志会員の捕物小説を捕物特集雑誌として上梓し、斡旋手数料を抛出し、補填するシステムを取っていた。以上のような経緯で結成され

た同会であるが、その結成前後から捕物帳が注目されるとともに、探偵小説文壇からの言及が目立つようになる。それは捕物帳という作品形式への賛否である。例えば否定派としては、

捕物帳といえは、日本の探偵小説界では最も売行のよいジャンルである。（略）この捕物帳の未来はどうであろう？未来ある分野であるか？それとも将来絶滅する分野であるか？捕物帳が、セコンド・ハンドのホームズ物の領域に止まる限り答は後者である。（略）捕物帳がもし将来性があるとするならば、過ぎた時代の風俗小説としてであろう²⁷

というものが挙げられる。否定派としてはやはり捕物帳は探偵小説ジャンルとしてではなく、あくまで時代小説、または遠い過去を描く風俗小説でないのかという指摘である。一方肯定派としては胡堂の、

捕物小説の構成上の制約は実に大きい。第一に、ピストルも青酸加里も使へない。ビルディングで活躍することも出来ない。時間の問題にしても、ゴーンと鳴

る鐘の音にしか頼るべきものがない。(略)嘗て、徳田秋声と田山花袋が、「一つ大衆小説を書いて見ようじゃないか、ハツハツハ」と話し合つたといふことであるが、秋声や花袋は大家作家ではあるが大衆小説は書けなかつたように、俺も一つ探偵小説を書いて見ようと云つた作家達を、私は軽蔑する²⁸

近頃大いに現れた若い捕物作家達に、この形式の小説を「高い芸術」にまで引上ることを囑望して引込みたいと思つてゐる²⁹

といったようなものが見受けられる。胡堂自身が捕物帳作家の首領たる立場であることが多分に影響している発言だが、捕物帳の芸術性を高めることが批判に應え得る道であると、探偵小説へ芸術性を求めない乱歩とは意見を異にするとも取れる発言をしている。そして探偵小説文壇からの批判よりも、他ジャンルの作家の軽々しい流入への嫌悪感にこそ、胡堂の本音を感じすべきであろう。ちなみに胡堂は昭和二十六年八月より発刊した『捕物作家クラブ会報』においても「捕物小説の反省」と題して、捕物小説を「日本特有の『探偵小説』の高い位置」「立派な昭和年代の大衆

的芸術」を志すべきと言及している。ここにも乱歩との差異がうかがえる。また中立的な立場としては、

現代ものの方には新人雲の如く輩出して盛観を呈してゐるのに対し、捕物小説陣はいささか淋しいやうだ。³⁰

というような、捕物帖を書く新人作家の欠如、書き手の問題について言及するものが散見される。賛否はあるものの、捕物帳という作品形式について探偵小説作家から活発な言及があることは事実であり、この現象は戦前の捕物帳ブームとは異なつたものであつた。そんななか昭和二十四年七月、「捕物作家クラブ」編集の『小説の泉』が刊行された。同誌は、このクラブのイベント運営に関する費用を、メンバーによる捕物帳にて賄うという先述したシステムに由来している。しかし同誌に掲載された作品がすべて再録物であつた。この点は先の捕物帳における新人不足を端的に表していると同時に、結果的には戦後捕物帳ブームの終焉のひとつの要因ともなる。実際に探偵小説文壇からだけでなく、

捕物読物を、捕物小説の高さに引き上げようと努力する作家が何人か出ない限り、捕物帳は現在の低さから脱し切れず、いつまでも作品価値のひくい、一山いくらの安物で甘んじてゐなければならぬと思ふ。(略) 捕物作家のクラブを、こしらえるのも結構だが、お互ひに捕物小説を書く勉強をする方が先だ³¹

という村上元三のように、時代小説文壇からも既存の捕物帳への危惧と、時代小説作家と探偵小説作家が「お互ひ」に捕物帳という作品形式を見直すことの要請が言及されている。では乱歩は「捕物作家クラブ」に、また捕物帳に関してどのような立場を取っていたのであろうか。

われわれの探偵作家クラブ創立の相談をしたとき、私の考えでは捕物作家諸君にも入ってもらつてもりであつたが、発起人のうちに反対意見があり、結局現代もの探偵作家だけの会として発足したので、私は野村胡堂さんにすまないような気持ちになつてゐた。そこで、私は横溝、城の両君に、別に捕物作家クラブを作つてはどうかと勧めていたのだが、その希望がここに実現したのである³²

と回想しているように、当初は自身が会長である「探偵作家クラブ」への捕物作家たちの入会を希望していた。それはまさに大正期末に結成された「二十一日会」や「探偵趣味の会」のように、大衆文学ジャンルの可視化を目的としたからであろう。しかし彼らの入会を強く反対した人物こそ、乱歩と探偵小説・非文学論争を巻き起こしていた木々であった。探偵小説ジャンルを推理小説として純文学と比肩するジャンルへと再編成させようと企図していた木々にしてみれば、あくまで時代小説ジャンルの作品形式であり、推理やトリックに関して低く評価されていた捕物帳とは一線を画そうとするのは当然のことであろう。また乱歩は、

江戸の雰囲気を出した世話狂言としては面白いが、探偵劇としてはつまらないというこの不満は、小説「半七捕物帳」全体についても云えるのだが、ここに探偵小説としての捕物帳のむずかしさがある。だからと云つて、西洋探偵小説のような「推理」の要素を、あれ以上に取入れたら、今度は江戸の雰囲気がこわれてしまうかも知れない。(略) 探偵小説の立場からとなると、どうしても合理主義を無視できないのも事実であ

る。ここに探偵小説としての捕物帳の根本的な困難が横たわっているように感じられる³³

日本人の大多数は、トリモノに限らず、一般にエド時代を舞台にした通俗小説を非常に愛読します。ですから、トリモノ小説の読者は所謂探偵小説マニアではなく、エド時代への郷愁と、平易な筋や文章に惹かれているので、随つて、トリモノの読者は、現代もの探偵小説の読者よりも遥かに多いのです³⁴

というように、捕物作家クラブ結成を推し進めながらも、捕物小説と探偵小説の根本的な質の違いを指摘している。同時に、

捕物作家クラブができれば、新人を生む機運もできて来るだろうし、新しい型の捕物帳も生れて来るであろう。それを（ママ）という意味で私はこのクラブの計画が実現し活発に動き出す日を鶴首するものである³⁵

と、同クラブの結成によってそれまでの捕物帳とは異なつた、探偵小説作家たちからも賛同を得られるような捕物帳

が誕生することを期待している。実際に「探偵作家クラブ」会長として「捕物作家クラブ」のイベントへも積極的に関わっていたことも鑑みれば、乱歩は時代小説と探偵小説、両ジャンルの要素を含んだ捕物帳という作品形式を、一定の距離間は保ちながらも、探偵小説文壇からの捕物帳への批判から、底い立てしていたと見ることが出来るだろう。一方で既存の探偵小説ジャンルを打破しようと試みた安吾もまた捕物帳という作品形式に注目する。すなわち「明治開化安吾捕物帳」である。本作の序文では、

目のこえた読者を満足させるだけの複雑な構成は、最低三百枚、あるいは五百枚以下では盛りきれない。強いて短篇の推理小説を書く、豊かな物語性に乏しく、安直な骨組だけのバラックになってしまう³⁶

と既存の推理小説（安吾はこちらの語を使用している）の掲載形式の問題を指摘し、「この短篇探偵小説の欠陥を日本式にみたしているのが捕物帖である」³⁷と続けている。さらに、

捕物帖は読み物の面白さを加味することに成功して

いるが、推理を味うたのしさが欠けている。(略)だが、果して捕物帖で、推理小説の要素をとり入れることは不可能であるか。これが私の多年考えていた小さな野心の一つであつたのである³⁸

と続け、物語の面白さを謎解きゲームの快楽に求め、それを捕物帖の新形式にまで高めようとする野心を掲げている。この安吾の動きと、既存の探偵小説ジャンルの変化を拒む乱歩が、共に捕物帳という作品形式へ注目していることは、興味深い事象である。

昭和二十六年三月十一日には「捕物作家クラブ」最大の企画とも言える「黒門町の伝七捕物帳」の連載が『京都日日新聞』において始まった。同作は城昌幸、陣出達郎、土師清二、山手樹一郎、野村胡堂、村上元三、角田喜久雄、高木彬光、横溝正史、水谷準ら「捕物作家クラブ」の面々が、毎週日曜日版の誌面にリレー形式で短篇小説を連載する形で、昭和三十五年十月十六日まで約十年間続いた企画である。また連載中から『黒門町伝七捕物百話』が桃源社から逐次刊行される(全八巻)など大規模な企画であり、それまでの再録物とは異なった新作であつたが、一面に収めるという紙面の都合もあり、質が低く、同時代における

捕物帖批判的に挙げられるような作品も少なくなかつた。

捕物小説、探偵小説に目を転ずると、全く低調というよりほかない。(略)ただ(京都新聞)に「黒門町伝七捕物帖」を、胡堂はじめ角田、村上など、捕物作家クラブのメンバー二十人が、一年余、連作をつけ、すでに八冊からの単行本を出しているマス・コミュニケーションの在り方は、新しい成功の一例として記録にとゞめよう³⁹

と、同時代の批評において、マス・コミュニケーションの新しい成功例としては評価を得つつも、同企画を以て捕物作家クラブの主だった活動はなくなる。それと同時に捕物帖という作品形式自体の執筆も減少し、戦後の捕物帳ブームと言える事象は終焉を迎えたのだった。

VI

昭和二十七年四月二十八日、サンフランシスコ講和条約が締結され、GHQの占領は終わりを告げた。同年を前後

にチャンバラ剣戟が解禁され、堰を切ったように剣豪ブームが到来した。同ブームを牽引したのは柴田錬三郎（『眠狂四郎』）や五味康祐（『柳生武芸帳』）ら、週刊誌を主戦場に、いわゆる純文学の領域に属した作家だった。いわば純文学／大衆文学といったジャンル区別がより曖昧となり、中間小説というワードも文壇を賑わせていく。一方で探偵小説文壇はどうであったか。乱歩が

探偵小説論とクラブの運営とは全く別個のものであった。クラブは色々な作風と意見を持った広義の全探偵作家の集りであつて、意見を異にするものを排除するというような性格の会ではないことをこの際再確認したい。（略）これは私の多年の考え方なのだが、今日では捕物作家クラブというものが既に成立しているのだから、さしあたっては、姉妹クラブとして一層連絡を密にすることが望ましい⁴⁰

と創立五年目を迎える年に、会長として改めて探偵小説クラブの分裂を防ぎ、捕物作家とより密になることを改めてクラブの方針として提案するのに対し木々は、

探偵作家クラブにもう一つの別会を有し度い。その別会には文壇の大衆作家、純文学作家を問はず、怪奇小説、推理小説の好みを有する人達にもよびかけて、本格でいぢめないで、その人達の探偵小説めいたものをも温かくとりあげる雰囲気のものにし度い⁴¹

と、同号で純文学作家との区別を計らず、流入を狙った会の結成を希望しているなど、二人のすれ違いは続いていた。文学性、芸術性を重視せず、既存の探偵小説ジャンルにこだわりを持ちながら、捕物作家クラブという横のつながりを求める乱歩。一方、既存のジャンルに疑義を掲げて純文学作家の流入を希望するなどジャンルの拡大を標榜しながらも、特定の一派を排除するようなセクト主義的な木々。両者の態度と行動には捻じれが生じていると言える。しかし他方で、

私は探偵小説に恋愛を感じた。そして、若年者がこれだけで簡単に結婚に突入するように、私もあわや探偵小説と結婚しようとした。――世間的には、もう結婚したとみられているかもしれない。しかし私は、探偵小説に惚れてはいるが、信頼していないことに気が

ついで、いまさら愕然としている。(略)私は豁然大悟して、爾今、探偵小説を情婦の位置におこうと思つた⁴²

と宣言する山田風太郎のように時代、探偵、伝奇小説など、ジャンルそのものを無視する、あるいは固執しない作家が頭角を現し、彼らからの既存探偵小説文壇に対する苦言も目立つようになってくる。そもそも自ジャンルに関するクラブを結成し、またその会報を発刊という行為は自ジャンルにおけるある種の基準や方針を明示することであり、同時に量だけでなく、質を要請するということを意味していると考えられる。戦時下から占領下を経て、そういった大衆文学ジャンルの再編成が一部の作家たちによって議論される中で、同時代雑誌に特集が組まれ、特集本の刊行などを含め、組上に挙げられたのが、探偵小説と時代小説、両ジャンルの要素を持った捕物帳という作品形式であったことは間違いないであろう。

【注】

- 1 セシル・サカイ『日本の大衆文学』（平成九年二月、平凡社）
- 2 尾崎秀樹『大衆文学の歴史 上』（平成元年三月、講談社）

- 3 注2と同様。
- 4 横溝正史「佐七誕生記」（『探偵作家クラブ会報』昭和二十三年十一月）
- 5 注4と同様。
- 6 梶野恵三「大衆文芸評」（『大衆文芸』昭和十七年五月、新小説社）
- 7 中原麟也「大衆文芸評」（『大衆文芸』昭和十七年六月、新小説社）
- 8 「愛読者欄」（『新青年』昭和十五年四月、博文館）
- 9 木々高太郎「大衆文芸の概観」（『文芸年鑑』昭和二十三年九月、桃蹊書房）
- 10 鹿島孝二「明日の大衆文芸」（『出版情報』昭和二十二年九月、日本宣伝社）
- 11 拙稿「占領下における明朗時代小説の躍進—B六判雑誌『読物と講談』と山手樹一郎『夢介千両みやげ』—」（『立教大学日本文学』令和二年一月、立教大学日本文学会）
- 12 江戸川乱歩『探偵小説四十年』（昭和三十六年七月、桃源社）
- 13 谷口基「山田風太郎と読書文化—戦後派探偵作家の〈教養〉の行方—」（『日本近代文学』平成十九年十一月）
- 14 江戸川乱歩「第十六回土曜会記録」（『探偵作家クラブ会報』昭和二十二年十月）
- 15 海野十三「探偵小説雑感」（『探偵作家クラブ会報』昭和二十二年十一月）
- 16 木々高太郎「新泉録」（『ロック』昭和二十二年一月、筑波書林）
- 17 江戸川乱歩「二人の芭蕉の問題」（『ロック』昭和二十二年二月、

- 筑波書林)
- 18 江戸川乱歩「探偵小説の宿命について再説」(『ロック』昭和二十二年四月、筑波書林)
- 19 木々高太郎「新泉録」(『ロック』昭和二十二年五月、筑波書林)
- 20 江戸川乱歩「論議の新展開を」(『ロック』昭和二十二年六月、筑波書林)
- 21 注12と同様。
- 22 注12と同様。
- 23 水谷準「探偵小説やーい」(『ロック』昭和二十一年十月、筑波書林)
- 24 「探偵小説壇」(『宝石』昭和二十一年六月、岩谷書店)
- 25 注24と同様。城昌幸『『宝石』別冊』(『捕物作家クラブ会報』昭和二十九年一月)によれば、この特集号は「発行してみると、発禁にも会はず、文句も喰らはなかった。それに売行きが圧倒的に良かった」とある。
- 26 佐々木杜太郎「捕物作家クラブの歴史」(『名作捕物小説集』昭和二十八年二月、岩谷書店)
- 27 天城一「捕物帳について」(『関西探偵作家クラブ会報』昭和二十三年五月)
- 28 野村胡堂「捕物小説について」(『探偵作家クラブ会報』昭和二十三年十二月)
- 29 野村胡堂「捕物小説のむづかしさ」(『探偵作家クラブ会報』昭和二十四年十一月)
- 30 戸川貞雄「捕物帳雑感」(『探偵作家クラブ会報』昭和二十四年十一月)
- 31 村上元三「捕物小説について」(『小説の華』昭和二十四年六月、八千代書院)
- 32 注12と同様。
- 33 江戸川乱歩「最初の捕物劇」(『読物と講談』昭和二十五年十月、公友社)
- 34 江戸川乱歩「欧亜二題」(『読切小説集』昭和二十七年十一月、荒木書房新社)
- 35 江戸川乱歩「捕物小説寸感」(『小説の華』昭和二十四年六月、八千代書院)
- 36 坂口安吾「序文」(未発表)
- 37 注36と同様。『捕物作家クラブ会報』においても白石潔が「嫌われてきた捕物帖」(昭和三十年七月)と題した小文で、「捕物帖を一段と生かすなら、短篇をやめて(略)長篇に活路を開くべきでしょう」と言及している。また同会報の昭和二十八年十一月号には北園孝吉が「捕物帖と捕物小説―捕物帖の限界について―」と題して、新しい形式の捕物はあくまで捕物小説であって、半七以来の捕物帖ではないという呼称問題について言及している。
- 38 注36と同様。
- 39 大平陽介「大衆文学展望」(『文芸年鑑』昭和三十年六月、日本図書センター)
- 40 江戸川乱歩「クラブの性格と運営についての提案」(『探偵作家ク

ラブ会報』昭和二十七年五月)

41 木々高太郎「五周年」(『探偵作家クラブ会報』昭和二十七年五月)

42 山田風太郎「情婦・探偵小説」(『鬼』昭和二十七年七月、鬼クラブ)

(立教大学大学院博士課程後期課程・さいたま文学館学芸員)